

連載 オブジェクト指向と哲学

第 68 回 時間と空間(2) - 西洋人と東洋人

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

渡辺慧「時」[1]は、物理学者による時間についての哲学的考察を集めて一冊の書籍にしたものです。その一章で、人の性格は「時間型」と「空間型」に分類できることを示しています。

一方、リチャード・E・ニスベット「木を見る西洋人 森を見る東洋人」[2]は、書籍のタイトルに端的に示される如く、西洋人と東洋人の思考パターンの違いを議論する書です。

この独立した 2 つの書を見比べると、時間型は西洋人に、空間型は東洋人に重なってきます。

●性格の分類

人の性格を時間型と空間型に分類を試みる[1]の論点を表 68-1 にまとめます。時間型と空間型を様々な視点からの対比と重ね合わせています。

視点 \ 分類	時間型	空間型
感性	聴覚型	視覚型
芸術	音楽型	絵画型
認識形式	時間型	空間型
科学	解析型	幾何学型
	論理型	直感型
	抽象的	具体的

表 68-1 時間型と空間型

この対比は著者の哲学的考察から導かれたものであり、調査結果ではありません。これを例えば視点ごとに 5 段階で数値化し、サンプル調査結果をプロットして行けばどのようなグラフになるでしょう。

興味あるポイントは 3 つです。第 1 は視点ごとに得られたデータの相関関係はどの程度でしょうか？例えば聴覚型対視覚型のデータと音楽型対絵画型のデータはどの程度似ているのでしょうか？視点ごとのデータの相関関係は 1 にかなり近いであろうというのがこの表です。

第 2 のポイントはグラフの形状です。フラットに近いのか、平均あたりに山があるのか、あるいは左右に山があり平均あたりは谷なのか 3 つのパターンが考えられます。[1]では「中間型は多くないように見える」としています。

第 3 のポイントは、サンプルの母集団によりグラフの形状はどうなるのかです。男性と女性、年齢別、民族別などで平均値と分布の相違点など興味のあるところです。

●西洋人と東洋人

西洋人の思考パターンは、まず自己があつて次に世界がある。東洋人は逆で、世界があつてその一部として自分は取り込まれている。西洋人は個人を優先し、東洋人は全体の調和を優先する。西洋人は分析的に物事を捉えるが、東洋人は包括的に捉える。それが端的に「木を見る西洋人、森を見る東洋人」[2]で表されています。

[2]の論点を表 68-2 にまとめます。

木を見る西洋人	森を見る東洋人
個人の主体性	全体の調和
分析的	包括的
抽象的思考	具体的思考
論理、推論	経験
個-集合	部分-全体
名詞	動詞／関係

表 68-2 木を見る西洋人、森を見る東洋人

西洋人の抽象的思考、論理／推論主義は時間型の特徴であり、東洋人の具体的思考、経験主義は空間型の特徴です。

西洋人、東洋人と言ってもそのままひとくくりにはできません。世界はそれほど単純ではありません。もう少し見て行きたいと思います。

●文化の分類

時間型対空間型の分類は人の性格のみならず「文明の型にも当てはまるように思われる」[1]とあります。

--

ラテン型文化、スラブ型文化に対立するものとしてゲルマン型文化の特徴は確かに「音楽的」「時間的」であるといえよう。これに密接に関連して、「動的」「抽象的」「唯心的」「思弁的」等の形容詞を加えることがゆるされそうである。これに対してラテン文化は「絵画的」、「空間的」、「具象的」、「唯物的」、「感覺的」等の形容詞が、大ざっぱであるがあてはまるといえよう。[1]

--

この一節、表 68-3 にまとめます。

視点	分類	ラテン型文化、スラブ型文化	ゲルマン型文化
芸術		絵画的	音楽的
認識形式		空間的	時間的
静的動的		静的	動的
		具象的	抽象的
		唯物的	唯心的
		感覺的	思弁的

表 68-3 ラテン型文化対ゲルマン型文化

西洋人の抽象的思考、論理／推論主義は時間型の特徴としましたが、ここではゲルマン型に対応します。東洋人の具体的思考、経験主義は空間型の特徴ですが、ここではラテン型に対応します。つまり西洋でもラテン型文化は東洋人と親和性があることになります。

「日本は視覚型であり、絵画や手芸は発達したが、音楽や抽象理論は西洋のように発達しなかった」[1]としていますが、そうは言っても雅楽には千数百年の歴史があり、簡単には結論付けられないと思います。この主張は「ラテン文化は視覚型であり絵画は発達したが、ゲルマン文化のように音楽は発達しなかった」に置き換えることができますが、そういう傾向もありますが 100% そうだとは言っていません。それほど単純でないことは著者も十分承知の上で述べられています。

●インド・ヨーロッパ語族

西洋人は名詞を重視し、東洋人は動詞を重視する傾向にあります。[2] (表 68-2)

--

東アジアの言語では、英語やその他のヨーロッパの言語に比べて動詞が目立ちやすい。中国語、日本語、韓国語の動詞は文の最初か最後にくることが多く、いずれも目立つ場所である。英語の場合には、動詞は多くの場合真ん中に現れている。[2]

--

確かに英語の第 3 文型 SVO（主語-動詞-目的語）は動詞が真ん中です。

この「東アジア」にインドは含まれていません。

--

東洋でもインド文化はゲルマン型に近く「音楽」「哲学」「数学」が発達した。[1]

--

としていますが、言語的にもインドは西洋に近い。

--

ウィリアム・ジョーンズというイギリス人が、インドの古典語であるサンスクリットと、古典ギリシャ語やラテン語と類似性があることを発見した。ヨーロッパとインドという距離の遠さにもかかわらず、文法や語彙の著しい一致に彼は驚き、それを発表すると大きい反響を生んだ。1786 年のことである。これがインド・ヨーロッパ語族という言語グループの発見の発端である。[4]

--

言語系が近いということは文化の傾向も共通点がありそうです。

●ドイツ音楽としてのクラシック音楽

クラシック音楽と古典音楽はほぼ同義に用いられていますが、クラシック音楽は特にドイツ音楽が中心となっているという議論があります。[3]

--

クラシック音楽は、ヨーロッパ世界の中でも限られた地域の、しかもたった 2 世紀という限られた時代の音楽に過ぎない。[3]

--

--

バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンから、シューベルト、シューマン、ワーグナー、ブラームスに至る、ドイツ音楽の系譜が完成する。これは、19 世紀に誕生した、ドイツ音楽こそが最高の芸術音楽であり、クラシック音楽であるというドイツ音楽中心の音楽史観の産物である。[3]

--

「音楽は近代の芸術であるとともに、本質においてゲルマン的な芸術である（フィッシャー）」

[3]という言葉は、ゲルマン型文化は時間型であるという[1]の主張と重なります。

以下、次回...

参考書籍

[1]渡辺慧、時、1974 (2012 復刻版)、河出書房新社

[2]リチャード・E・ニスベット、[訳]村本由紀子、木を見る西洋人 森を見る東洋人、2004、ダイヤモンド社

[3]浦久俊彦、138 億年の音楽史、2016、講談社現代新書

[4]小谷善行、系統樹と語源・ヨーロッパのことばの分化、2016/8、数学セミナー (vol.55)、日本評論社